

笑顔かがやく光っ子

みんなで育てる光っ子

学校便り

第345号
平成27年9月1日

練馬区立光が丘第八小学校
校長 鈴木 隆志

石井筆子と大石順教

校長 鈴木 隆志

石井筆子<1864（文久1）年～1944（昭和19）年>は、生涯を知的障害児教育に献げた偉人です。江戸時代末期、開明的な武士の家に生まれ、高い教養を身に付け語学堪能となった筆子は、若くしてヨーロッパの文化に触れ親しみ、津田梅子らとともに日本の女子教育の確立に大きく貢献しました。結婚し、三人の娘に恵まれた筆子でしたが、次女は生まれてまもなく、三女は6歳で他界しました。もともと病弱だった夫も早死にし、残された長女には知的障害がありました。

絶望にうちひしがれた筆子でしたが、石井亮一との運命的な出会いによって、彼女の人生は大きな転機を迎えたのでした。石井亮一は、日本最初の知的障害児福祉施設「滝乃川学園」の創設者です。滝乃川学園の前身は、1891（明治24）年の濃尾大地震をきっかけに生まれた「孤女学院」です。濃尾大地震はマグニチュード8.0の大震災で、死者7273人という甚大な被害を引き起こしました。亮一は現地に駆けつけ、16名の少女孤児を引き取り保護し、震災から二ヶ月後に孤女学院を設立しました。孤女学院は、広い敷地を求めて西黒門町（現東京都台東区）から滝野川村（現北区）に移転します。そして、少女孤児の中に2名の知的障害児がいたことから、滝乃川学園と改称し、知的障害児教育に特化した総合的な福祉施設を目指したのです。

筆子は設立当初から関わり、のちに亮一と再婚することとなります。その後、滝乃川学園は、成人した学園生のために働ける農地を提供するため、谷保村（現国立市）に移転しますが、筆子は学園のために尽力を続けます。亮一亡き後には、第二代学園長として終生を知的障害児教育に献げました。筆子は、障害者の母であり、献身的な妻であり、信念を貫いた教育者でもありました。

大石順教<1888（明治21）年～1968（昭和43）年>は、両腕を失いながらも、生涯を身体障害者の自立支援に献げた偉人です。大阪道頓堀の二葉ずしの長女として誕生し、幼名は米子よねこといました。幼い頃から舞踊の才能を発揮し、十歳で名取りとなり、芸名・妻吉として芸を磨き舞に精進します。

ところが、17歳の時、養父が狂乱により6人を殺傷する「堀江六人斬り事件」を起こします。順教だけは命が助かりますが、両腕を失ってしまいます。やがて、苦難と周囲の好奇の目に耐えながら、巡業芸人の道を選び、その生活の中から、口筆で絵を描く日本画家となっていきます。結婚し子供も授かりますが、出家得度し、京都山科の勧修寺に日本で初めての身体障害婦女子の生活自立のための精神道場を設立し、献身されるのです。順教は、諦めないということと必ず成し遂げるという信念を生涯もち続け、一日一日の営みを大切に積み重ねてきた人なのです。

順教は、「自分を捨てるということは、物や立場を捨てることではなく、他の立場に立って見ること、他のよさが見える愛をもつこと」、「障害者であろうと健常者であろうと、老人であろうと子供であろうと、壮年であろうと青年であろうと、病人であろうと健康な人であろうと、男であろうと女であろうと、この世に光らないものは一つもない」ということを、私たちに教えてくださいました。

私たちは、先人から多くのことを学ぶことができます。石井筆子と大石順教、二人の女性からは、信念を貫き、他者のために人生を献げる尊さを学びました。光八小は、「包容（広い心で相手を包み込み、受け入れること）」の合い言葉のもと、校長も副校長も、教員も、職員も、それぞれの信念を貫き、光っ子たちのための教育を積み重ねていきます。